

## [035] 語文研究表紙奥付等

<http://hdl.handle.net/2324/10235>

---

出版情報：語文研究. 35, 1973-08-31. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



▼昭和47年度卒業論文題目

学部

為永春水の研究

「沙石集」の文学性について

九州大学所蔵本「平語」における発音注記

「ツメ・ノム」について

中世小説の一面について

―その仏教色から―

太宰治と罪の意識

「二・二六事件三部作」と三島由紀夫

上田秋成の仏教観

堀辰雄

修士

石川淳文学の研究

▼二十二回西日本国語国文学会

研究発表(本会会員関係のみ)

「杖植紀行」について

大江嘉言集について

琉球与那国島方言における所謂古音について

アクセント資料としての謡曲譜本

片仮名本「因果物語」の刊行と編者行巖雲歩をめぐって

若木 太一

説話集「目録」訓説について二、三の問題

―古本説話集の場合―

無外庵既白小伝

「花鳥余情」における「河海抄」説批判

見立絵本の系譜

▼九大国語国文学会総会並びに研究発表会

昭和48年6月10日

於九州大学

研究発表

源氏物語宇治十帖研究

―浮舟還俗問題について―

天理本狂言六義の語法

―名告の文末表現について―

松平文庫蔵「姫君私言」

古本住吉と狭衣物語

蕉門俳諧師の方法

甲子吟行画巻成立の意味

助動詞「ヨウ」の成立をめぐって

公卿補任を通じてみた保元の乱と保元物語

仮名遣い以前

▼新入会員歓迎会

▼卒業論文構想発表会

▼卒業生歓送会

山口 康子・福田 益和

田中 道雄

徳満 澄雄

中野 三敏

中島あや子

田籠 博

渡辺真理子

森下 純昭

石井 大

井上 敏幸

迫野 虔徳

笠 栄治

春日 和男

板坂 耀子

福井 迪子

上村 孝二

添田建治郎

昭和47年11月11日

昭和47年11月25日

昭和48年2月26日

於うを千

於長崎大学教育学部

於九州大学

於国文演習室

23 同第五卷による。

24 同第五卷による。

25 群書類従による。

26 浜千代清氏「連歌と伝道」(仏教文学研究四所載)

27 古典文庫「連歌論新集」(伝宗紙)

28 岩波文庫「連歌論集下」

〔追記〕

本稿脱稿後、新に発行された片桐洋一氏著「中世古今集注釈書解題二」を拝見した。同著には、従来未翻刻の注釈書が幾つか翻刻され、また、「研究篇」に於いても関連した注釈書の本  
文の引用がなされていた。これらによって、この論文の第四章へ中世の今集注釈書との関連に聊補足すべき事実を知り得たので、次に記す。片桐氏の偉業に感謝の意を表したい。

まず、和歌三国伝来記を伝えている注釈書は数多いが、その中で、「三流抄」にのみ見える「乱文」という言葉を使っているのは、大東急記念文庫本「古今和歌集聞書」、京大付属図書館中院家田蔵書「古今序抄」、東山御文庫蔵「古今和歌集聞書」の三書である。これらの書は、この点から見ると、「三流抄」等の初期の注釈書を素直に受け継いでいるといえよう。

また「古今和歌集頓阿序注」は、難波津の歌の本説における人名の点と、浅香山の歌における「采女が葛城の王の供をして下った」という点において、「姫宮私言」に一致する。

なお、小野小町と大江惟章の關係は、「弘安十年古今集歌注」や、伊勢物語の注釈書「星宮口伝」にも伝えられている。

受贈圖書 47年10月〜48年6月

文芸論

天地のはじめ(古事記上巻真訳その1、2)

村山館文庫目録(国文学關係)

西日本歳時記

能古

近世文学 作家と作品

三本対照 捷解新語 本文篇

鏡花全集 1〜28

荷風全集 1〜28

今川為和集(中)(中世歌書翻刻 第4冊) 秋成(第35回展)

名古屋大学国語国文学論集

(松村博司教授定年退官記念)

王朝 第六冊

日本近代文学大系48 大正短篇集

イソップ伝の研究

圖書寮刊詞林金玉集 上巻

原始日本語研究―日本語系統論への試み―

中世文芸叢書 別刊III

春日和男

春日和男

伝習館郷土文庫

小原菁々子

小島吉雄

中村幸彦

浜田敦

谷口鉄雄

谷口鉄雄

稲田浩子

天理図書館

名古屋大学国語国文学会

王朝文学協会

助川徳是

島田清太郎

宮内庁書陵部

神戸学術出版

広島中世文芸研究会

1、参考文献・論文

橋本進吉「古本節用集の研究」

山田忠雄「橋本博士以後の節用集研究」(『国語学』第五輯)

中田祝夫①「古本節用集六種研究並びに総合索引」

②「文明本節用集研究並びに索引」

佐藤茂「易林本節用集字部の和訓」(『福井大学文学芸学部紀要・人文科学』12号)

渡辺綱也「明応本節用集研究編」(新潟大学「人文科学研究」29号)

新村出「伊京集解題」(旧帝国図書館による写真複製のため。)

右の外、古本に関する研究一覧が、中田②の初めにある。

2、佐藤茂 前掲註1の論文65へ

3、中田祝夫 前掲書①の序文3へ

4、橋本進吉 前掲書64へ、新村出 前掲6へ

5、文明・正宗・明応・天正・饅頭屋本及び玉里本

6、奥村三雄「日本漢字音の体系」(『訓点語と訓点資料』六輯)

湯沢質幸「国会図書館蔵本『略韻』の唐音」(同右誌四十六輯)による。猶高本漢「中国音韻学研究・方言字彙」663へには中国南方音に開

音形のある点報告があるが、日本側の資料の大勢から見て、一応問題外としておく。

7、池上禎造「方」字の合音用法」(『島田教授古稀記念国文学論集』)

8、「伊京集」の四つ仮名を精査したが、中田①の研究篇に上げられた例

を出なかつた。

9、字鏡集は野口恒重氏の三本対校本(希購典籍蒐集会)

下学集は中田祝夫・林義雄「古本下学集七種研究並びに総合索引」

温故・運歩は中田・根上剛士「中世古辞書四種研究並びに総合索引」

倭玉篇は中田・北恭昭「倭玉篇研究並びに索引」による

10、「日本国語大辞典」小学館

11、佐藤茂の前掲論文63へに「特に(名義抄の)〈端〉の訓はさきの伊(伊京集)と相通ふものである」とある。

12、散木奇歌集・雑下「引きかへの牛の、この外にちいさくて瘦せて、

引かざりしかば、いほうしりとつけて笑ふほどに」梁塵秘抄二「をか

しく舞ふものは(略)囃せば舞ひ出づるいほうじり、かたつぶり」

13、佐藤茂 註2と同所

14、中田祝夫 註3と同所

15、山田忠雄「節用集と色葉字類抄」(『本邦辞書史論叢』)

追記

末筆ながら、本稿をなすにあたって御教示を賜った奥村三雄先生、文章を御批正下された添田建治郎助手のお二方に對し深甚の謝意を表する。

受贈雑誌 47年10月〜48年6月 ②

国語国文学(東京学芸大) 7/都大論究11/国文学研究(早稲田大) 48/49/學術研究(早稲田大) 21/演劇学(早稲田大) 14/演劇博物館蔵書目録18/国学院大学紀要11/国学院雑誌784/792/国学院大学日本文化研究所紀要30/31/国学院大学日本文化研究所報9卷5/中央大学文学部紀要31/32/中央大学国文16/日本文学(明治大) 5/明治大学教養論集75/研究年報(学習院大) 19/国語国文論集(学習院女子短大) 2/日本大学人文科学研究所紀要15/国文学論集(上智大) 6

異形の名告が持つ性格を、少い例証と共にのべてきた。例えは「ト云」で記されるその内容が、単に会話の要旨を示したにすぎないのではないかという疑いは残る。この度は、一切これを無視したけれども、考えるべき問題と思っている。小考は国語史の具体的な問題については述べなかつた。筆者の興味はもっぱら天理本狂言六義の語法を明らかにする事にある。その性格づけの試み的一端につき触れたものである。

（本稿は、九州大学国語国文学会研究発表会に於て述べた要旨を、新たな視点で改稿したものである。）

註1 笹野整校訂「わらんべ草」（岩波文庫）による。

註2 「狂言名ノリの言い切り」（国語学、52集）

註3 なお詳しくは、池田広司著「古狂言台本の発達に關しての書誌的研究」の記述を参考されたい。

山本清「『虎清本の語法』おりやらしです」の考察（国語国文学、3）

註4 鎌谷清人「おりやらしです考」（国語学、64集）

註5 註3の書、第二部第四章「名ノリ」罷り出でたる者は「」の表現意識。

註6 「大藏流古狂言における待遇表現法の研究」（広島大学文学部紀要、第30巻）、「国語史料として見た大藏流狂言古本」（文学・語学、66号）

註7 「天理図書館蔵『狂言六義』における敬語の考察」（共立女子学園八十周年記念論集）

周年記念論集）

註8 「狂言のことば」（能楽全書、第五巻）

註9 註3の書に翻刻されている。

註10 「固定前の狂言」（国語と国文学、27巻10、11号）

受贈雑誌 47年10月～48年6月 ③

- 文学論藻（東洋大）47／立正史学37／東京女子大学日本文学38  
 東横国文学（東横学園女子短大）5／専修国文13／青山学院  
 女子短期大学紀要26／富士論叢（富士短大）18巻1／跡見学園  
 国語科紀要21／実践国文学23／成蹊大学文学部紀要8／清泉  
 女子大学紀要20／国文目白（日本女子大）11／国文目白合（白  
 百合女子大）4／学苑（昭和女子大）394／398400402／芸芸論叢（  
 立正女子短大）9／駒沢国文9／帝京大学文学部紀要4／大妻国  
 文4／日本文学研究（大東文化大）12／和洋国文研究（和洋女  
 子大）9／房総文化（和洋女子大内房総文化研究所）12／人文  
 研究（神奈川大）5253／国文鶴見（鶴見女子大）8／鶴見女子  
 大学紀要10／玉藻（フェリス女学院大）9／相模女子大学紀要  
 3536／都留文科大學研究紀要第7集別冊／野州国文学（国学院  
 大学栃木短大）1011／高崎経済大学論集15巻2／4／人文論集  
 （静岡大）23／研究紀要（静岡女子大）6／名古屋大学文学部  
 研究論集20／名古屋大学国語文学3132／国語国文学報（愛知教  
 育大）25／愛知県立大学文学部論集23／説林（愛知県立大）21／  
 県大国文（愛知県立大）7／アカデミア（南山大）92／東海学  
 園国語国文（東海学園女子短大）4／淑徳国文（愛知淑徳短大）  
 14／椋山女学院大學研究論集3／岐阜大学教育学部研究報告21  
 国語国文学（岐阜大）9／語学文学研究（金沢大）3／金沢  
 大学教養部論集10／滋賀大國文10／皇学館論叢5巻1／6、6  
 卷1／国語国文（京都大）41巻9／12、42巻1／5／人文科学  
 （同志社大）2巻1／同志社国文学8／外国文学研究（同志社  
 大）45／立命館文学302／318／龍谷大学論集4001

のアクセント資料としての意義については、氏の論文「アクセント史料として見た平曲譜本」（『文學研究』第69輯）において普遍化して述べるところがある。

確かに本書は、そこに施された莫大な量と質の発音注記、節ハカセといひ、近世初期の京阪アクセントの現実の姿を旋律の上に反映するその精度といひ、既に世に出ている幾多の国語音韻資料に遜色なく、国語史、とりわけ近世初期における広義、狭義両面にわたる音韻研究の上に新たな発展を確かに約束するものといえよう。清濁、四つ仮名、オ段長音の音韻論的解釈をはじめとし、話線を伴なうアクセントの観察に至るまで活用の途をあげれば枚挙にいとまがない。尚、少なからぬ索引書、資料紹介書の類が研究篇を用意せずに事足れりとする中で、本書の「解題」の筆を執られた氏には、本書刊行より早く「平曲譜本に反映したアクセント」（『國語と國文學』昭和45年10月特輯号）と、新しく、前記『文學研究』第69輯所載の論文との二つの報告が、謂ゆる〈研究篇〉に相当するものとして発表されており、橋本進吉、岩淵悦太郎、亀井孝、金田一春彦の諸氏の研究業績を継いで、平曲譜本の活用の途が氏によって改めて見出されたかの観がする。尚論文とも併せて参照されたい。

「比較的未紹介のいろんな文献を、次々、研究者の手許に」という京都大学国文学研究室のこの度の事業は、国語学の諸分野に貢献する所、大なるものがあるが、本書もその一として特筆すべき資料であることを紹介しておきたい。

（臨川書店 全三冊 二〇〇〇〇川）

愛媛雑誌 47年10月〜48年6月 ④

- 女子大國文（京都女子大）67/68／待兼山論叢（大阪大）6／語文（大阪大）30／大阪府立大学紀要20／人文研究（大阪市立大）23卷10分冊／女子大文学（大阪女子大）24／大阪樟蔭女子大学論集10／樟蔭国文学10／日本文学研究（帝塚山学院大）45／殖生野國文（四天王寺女子大）3／武庫川國文（武庫川女子大）5／人文論究（関西学院大）22卷2／日本文芸研究（関西学院大）24卷2／4、25卷1／国文学（関西大）47／国文学研究ノート（神戸大）12／神戸外大論叢23卷1／6／研究紀要（甲南女子大）9／甲南国文（甲南女子大）47／文林（松蔭女子学院大）7／親和国文（親和女子大）67／国文学攷（広島大）61／中世文芸（広島大）50後集／方言研究年報（広島大）15／国語国文学誌（広島女学院大）2／国語国文論集（安田女子大）3／島根大学文学部紀要6／愛媛大学法文学部論集5／愛媛国文学研究22／山口大学文学会誌23／国文学研究（梅光女学院大）8／文芸と思想（福岡女子大）37／香椎渥（福岡女子大）18／国語国文学研究（熊本大）8／国語の研究（大分大）67別府大学国語国文学14／佐賀大國文1／国語研究（九州大谷短大）1／鹿児島大学法文学部紀要文学科論集8／薩摩路（鹿児島大）17／文学研究（九州大）70／九州文化史研究所紀要1218／文学論輯（九州大教養）20／万葉81／国語学9192／国文学17卷1416、18卷1／5／国立国語研究所年報23／日本学術会議月報13卷8／10、14卷23／国文学研究資料館報1／書陵部紀要24／文献ジャーナル11卷9／12、12卷1／5／解釈（解釈学会）18卷11／古典と近代文学（有精堂）13